

昭和二四年三月二日の早朝、暗い凍った道を、父は自転車に私の行李、荷物を入れるための網かご一つ乗せて、私が一五年間、生まれ育った家を後にしたのです。村はずれで大きな車が待っていました。父は私を抱き上げて乗せてくれました。今でも両脇に、そのときの父の手の温もりが残っております。

窓から見た、遠ざかる父の姿と、古里の黒い山々が、瞼の奥に残っております。

駅に着くと白い予防着を着た人が、私の後を消毒しながらついてくるのです。その時の情けなさ、悲しさ、悔しさ、一生忘れないでしよう。

学校でもいじめられました。すでに、母姉、兄と多くが療養所に入っていたので、なお強くいじめられました。「そばへ来るな」と、皆が私をよけて通るのです。

ペンや口では言うことは出来ません。先生からして嫌うのですから。私の忍耐強さは、そのときについた思っております。

残った家の方も大変だったと、父の便りで知りました。だから、五〇年間、古里へは帰っていません。親の死、肉親の死も知らず、二か月すぎて知らされました。公にできないハンセン病は、おそろしい病気です。

私も六八歳になりました。白髪になりましたが、やさしい主人にめぐり会い、主人の両親、弟、妹にも恵まれ、幸せです。三年前に主人をなくしましたが、カラオケに旅行に、又、川柳にと楽しんでおります。

肉親から捨てられた私ですが、良い友だちや、県人会の人たちと声を掛け合って毎日を過ごさせて頂き、今は感謝の日々です。いやな思い出が多い古里ですが、一度は見たいし、かつてのクラスの人たちにも逢いたいです。逢って下さるかどうか不安ですが。夢でしょうか。